

「情報処理学会論文誌：数理モデル化と応用」の発行にあたって

富 田 悦 次[†]

情報処理学会では、既存の情報処理学会論文誌 (Journal) とは別に、各研究会あるいはその連合体を主体として編集を行う論文誌 (Transaction) も発行して、より多様な価値を創造し、情報科学の新たな発展を図ろう、という改革方針を打ち出しました。これに呼応して、現在いくつかの論文誌 (Transaction) の出版あるいは企画が積極的に進められています。

情報処理学会「数理モデル化と問題解決研究会 (SIG Mathematical Modeling and Problem Solving: MPS)」は、いち早くこの方針に乗って、情報処理学会論文誌「数理モデル化と応用」(Transactions on Mathematical Modeling and Its Applications: TOM) 第1号 (Vol.40, No.SIG 2 (TOM 1)) を1999年2月に発行し、続いて第2号 (Vol.40, No.SIG 9 (TOM 2)) を同年12月、第3号 (Vol.41, No.SIG 7 (TOM 3)) を2000年11月に発行して、この第4号 (TOM 4) の発行に至りました。

こうして出発した本論文誌は、コンピュータを用いた問題解決が求められる理工系・人文社会系の諸分野全体を対象とし、問題の数理的把握とモデル化およびその有効な解決手法の開発、応用に関する活発な学際的研究発表の場として、独自の立場を確立するに至りました。これらは、大変興味深く、十分に選びぬかれた、質の高い論文の集まりとなっている、と非常にご好評をいただいています。本論文誌の最大の特長の1つは、その対応の迅速性にあり、よく磨き上げられた優れた投稿論文であれば、投稿から1カ月足らずで採録決定にまで至ることも可能です。これは、白石編集委員長以下の編集委員、査読者の方々の並々ならぬ用意周到な準備の下での任務遂行の努力により初めて可能となっているものです。ここに、常日頃多大のご尽力をいただいています関係各位に、改めて厚く御礼申し上げます。

なお、本論文誌への投稿論文は、MPS研究会あるいはシンポジウムにおいて、少なくとも一度は研究発表がなされた内容であればよい、と対応を柔軟化し

した。また、研究会発表の研究報告 (資料) のページ数制限に対してもできる限り柔軟な対応をいたします。さらに、本論文誌では、MPS研究会登録者でない方、情報処理学会会員でない方の投稿も、日本語あるいは英語のどちらでも受け付けます。事例紹介や問題提起に重点をおいた論文、誌上討論などについても、できる限り多様な形を認めて取り上げるべく検討をしています。

本論文誌およびMPS研究会に関しての随時の最新詳細は、ぜひ各ホームページ <http://www.ipsj.or.jp/sig/mps/TOM/>、<http://www.ipsj.or.jp/sig/mps/> をご覧ください。

ここで、本論文誌発行を機に「数理モデル化と問題解決研究会」の活動全体が非常に活発になったことは大きな成果です。すなわち、MPS研究会登録者および研究会での発表件数も増加の一途をたどり、発表に対する質疑応答もいっそう熱のこもったものとなり、これがまた、本論文誌の質の向上に大きく寄与しています。

なお2000年度から、MPS研究会では、新たに International Conference on Parallel and Distributed Processing Techniques and Applications (PDPTA) のテクニカル・セッション “Mathematical Modeling and Problem Solving” との共催 (於、米国 Las Vegas) を行っています。また、2000年10月の第61回情報処理学会全国大会・公開シンポジウム「新しい計算パラダイム」には、本研究会も積極的に協賛として加わり、続いて12月には、第7回 MPS シンポジウム「新しい計算パラダイム—量子/分子コンピュータ最前線」を開催し、ともに非常な盛況を得ました。これらが、本論文誌のいっそうの国際化、および、新しく重要な数理モデル分野への進展に対し、これから大いに寄与していくことを期待しています。今後とも論文誌に対し、これまでと同様、皆様方からの暖かいご支援とご鞭撻をたまわりますよう、心よりお願い申し上げます。

[†] 情報処理学会「数理モデル化と問題解決研究会」主査
電気通信大学